

# 若者の「適職探し」をサポートする人たち

情報は氾濫しているが、何を選ぶかが難しい時代。「適職探し」もそのひとつだ。迷う若者をサポートする人々は意外と近くにいる。

- インターシップの機会を積極的に提供している学校や地方自治体
- 体験型授業を行っているNPO（非営利組織）
- 今年度から各地にオープンしている「ジョブ・カフェ」を訪ねた。

## 足立西高校——1年生全員がインターンシップ経験

# 1 企業、ハローワークとの連携で 進路未決定者の数が減少

学校から社会に巣立っていく子どもたちに「働く」ってどういうことなのかを伝えておきたい……。フリーターや進路未決定者の増加に悩む足立区では高等学校と企業、ハローワークが連携し、地域ぐるみで子供たちに仕事を体験させる取り組みが活発だ。中でも都立足立西高等学校は、1年生全員にインターンシップ（職業体験）を実践。早くから仕事への関心を持たせるように取り組んでいる。

### 仕事を身近に感じられない生徒たち

足立西高校がインターンシップを学校行事に取り入れたのは四年前。教師たちが日常の生徒とのふれあひの中で、生徒の職業に対する知識や意識が希薄

になっていくことを肌で感じ取ったのがきっかけだ。足立区は元々、中小・零細の製造工場や商店が多い地区。しかし、街の姿も様変わりしつつある。同校で教鞭をとっている三浦正裕先生は、「以前は外にいれば、ものづくりの現場や商店の活気が自然に目に飛び込んでいた」と振り返る。それが「工場は技術革新が進んで仕事が見えにくくなり、大型スーパーの出現などで商店も少なくなってしまった」。

足立西高校の卒業生は「進学する者もいれば就職する者もいる。自分の夢に向かって浪人やアルバイトをしている者もいる」（湯浅友功校長）。さまざまな進路を目指す子供が集う校風で知られており、社会に有為な人材の輩

出に心を砕く学校だ。ところが最近、進路をはっきり決めていない「進路未決定者」の存在が徐々に目立ちはじめ、進路指導上の大きな悩みになりつつあった。

ハローワーク足立の細田誠統統括職業指導官によれば、「普通高校は進学指導に比べて職業教育がおろそかになりがち。そのため、進路が定まらない生徒が増える原因になっている」とみる。

### 1年生全員にインターンシップを実施



足立西高校では、1年生全員を対象にインターンシップを実施している

職業教育に対する問題意識を強めた足立西高校は、インターンシップの導入を決め、一年時の総合学習テーマに位置づけた。全員が体験できる仕組みにしたのは「就職希望者だけの行事に

しないため」。早くから進路を意識させることが目的だ。

さらに、インターンシップ以外にも、PTAと同窓会から講師を募り、職種ごとに分かれて、仕事や将来の進路について全校生徒が懇談できる機会を設けた。進むべき道を決めている生徒はその準備材料にできるし、決めあぐねている生徒には道筋をイメージするヒントになる。

こうした取り組みに力を入れることで、進路未決定者を減らすとともに、異世代間の人間関係が希薄になっていた問題も解消したかった。少子・核家族化の進展で、今の子供は同世代とのコミュニケーションは得意だが、その分、大人との接点が乏しく偏っている。

「今のような状況が続くことは、子供の精神的な成長にとっても良くないと強く感じた。在学中の早い段階から仕事を考えるきっかけを与えたい」（湯淺校長）との狙いもあった。

とはいえ、一学年二四〇人分の受け入れ企業を確保するのは至難の業。教師が分担して地元の企業に協力を呼びかけたが、「はじめは『作業が危ない』『面倒』『メリットがない』『どんな生徒が来るのか不安』などの理由で断られることも少なくなかった」（三浦先生）。それでも求人を出してくれる企業を中心に諦めずに依頼し、ハローワーク足立にも協力を求めて受け入れ先を増やしていった。

昨年一二月時点の受け入れ先は農業や製造業、スーパー、保育園など二七業種九五事業所。日程を年二回に分けて設定し、受け入れ事業所の集約を進めながら、生徒の希望体験先をマッチ

ングさせていく。インターンシップを体験した生徒の多くは、「働くことの大変さが分かった」「疲れたが、満足感を知った」などの感想を持って学校に戻ってくる。進路未決定者の数もここ数年減ってきており、親からも「毎年、実施してもらいたい」との希望が出てくるなど、忙しい先生たちは嬉しい悲鳴を上げているほど。

一緒に受け入れ企業を開拓してきた細田統括職業指導官も「足立西の生徒たちは、礼儀正しくしつかりしている。仕事を通じて幅広い大人と接することで緊張感が生まれ、意識が変わってきたのでは」と、その効果を実感している。

### 企業 のメリットは少ないが収穫も

受け入れ企業の一つである機械製造メーカーの印南製作所には、三年前と



幅広い受け入れ先の確保が目下の課題だ

昨年、それぞれ三人の生徒が「弟子入り」。社長と、受け入れのために担当を命じられた社員の二人が先生役になって教えてきた。一回の研修期間は三日間と短い、包装機械の部品の金属加工から組み立て作業までの工程を実地体験させている。「働く」ことをより実感させたいため、最終日の午後には、社長自ら、企業のあり方や社会との関わり、地域のつながりなどについても話して聞かせている。

二回の受け入れを経験した同社代表取締役の印南英一氏は「作業は多少の危険を伴うので安全性への気遣いが必要だし、担当者は本来の仕事がなくなるわけだから、当初は中小の製造業にとつてメリットはあまり感じられなかった」と話す。

それでも、「担当者は人生の先輩として『しっかり教えよう』との意識が芽生える。昨年は受け入れた女子生徒三人が実にしつかりしていた。製造現場は男の職場との先入観が少なからずあったが、そういった固定観念を変えてくれたことも収穫」と考えが変わってきたという。

### 製造業 の開拓が今後の課題

それでも、足立西高校のインターンシップに課題がないわけではない。学校側の目下の悩みは、製造業の受け入れ先が少ないなど、受け入れ先の業種にやや偏りが見られることだ。この取組には、地域を支える産業を生徒に知らせたいとの先生方の願いも込められている。「生徒のほとんどが地元っ子。地域の産業がどのように社会に貢献しているかを知らせたいし、行く

行くは地域を支える人材に育って欲しい」（三浦先生）と考えている。

製造業の受け入れが難しい理由について印南社長は、「画一的なタイムスケジュールが受け入れを難しくしているのではないかと指摘する。中小製造業の多くは受注生産が中心のため、大まかな生産計画はあっても、正確な生産量など直前にならないと見通しが立たない。数カ月前に依頼されても、実施時期の繁忙状況が分からず、受け入れを決断できないのが現状。ましてや、時期と期間がちりちり決まっていたら多くの企業は二の足を踏んでしまうというのだ。

「例えば、二日間なら受けられると考える企業があるかも知れない。三月は無理だけど五月ならOKというところもあるだろう。学校の都合も分かるが、もう少し融通性を持たせられないものか」と注文をつける。

### 学校側 の柔軟性で協力の道が広がる

その一方で、受け入れ先を広げるヒントも示唆。「中小の製造現場は馴染んだシステムで働いているが、それが理想だとは思っていない。わが社も四〇年以上やっているが、生徒を受け入れてみて、まだ工夫の余地があることが見えてきた。こういうメリットこそもっと宣伝すべきだ」とアドバイスする。「区内の学校の要請だし、巡り巡って社会が子供を育てるとの親心もある。わが社がそうであるように、多くの企業は一度受け入れればいい制度だとわかり、協力を惜しまないだろう」とみている。

（調査部 新井栄三）

## 神奈川県「若者就職支援センター」

# 2 混成部隊の強みを発揮して 若者の目線に立った相談で

ター、学生職業相談室等）の併設、経産省がインターンシップの普及といっ

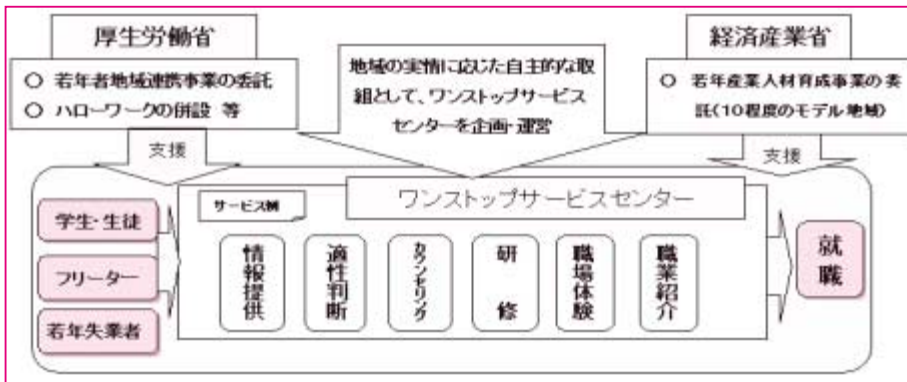
若者への職業紹介や能力開発などを一カ所で行う「若年者のためのワンストップサービスセンター（通称・ジョブカフェ）」が全国各地で続々と誕生している。昨年六月に政府が策定した「若者自立・挑戦プラン」の目玉事業のひとつ。七月までに、本年度中にオープン予定の四三都道府県でセンターが設置される。

ジョブカフェは、運営やプログラム開発を民間委託するなど、地域の事情に合った独自色を打ち出すことができる。基本的な事業内容は都道府県が自主的に決めるが、経済産業省、厚生労働省、文部科学省の関係三省が縦割り行政の壁を破って協力する。たとえば、厚労省がハローワーク（学生職業セン



廣田マネージャー

### ジョブカフェの事業



た職業体験事業をサポートするほか、地方自治体は今年三月から解禁された無料職業紹介なども組み合わせるといった具合だ。

### 混成部隊で相乗効果

訪れたのは、水曜日の昼下がり。横浜駅西口から徒歩八分という好立地も幸いしてか、平日にもかかわらず、カウンセリング・ブースはほぼ満杯だ。ここは、「ジョブカフェ」の名称を掲げていない。実は、すでに商標登録した人がいたため、神奈川県内では、「ジョブカフェ」を組織名称に入れることができない事情があった。「でも、『若者就職支援センター』の方が、事業内容をすばり表現しているし、結果的にはこちらのほうが良かった」と、マネージャーの廣田督氏は語る。



センターには引きも切らず若者が訪れる

もうひとつ、廣田氏は同センターの職員が出身の異なる混成部隊となっており、それが予想外の効果を生み出していると感じている。センターの職員は、現在一五人。県のほか神奈川県経営者協会、雇用・能力開発機構、キャリア・カウンセリングを行う民間企業からの派遣者で構成されている。つい最近、事業予定にはなかったパソコン教室開催の申し出が経営者協会からあった。予算も経協持ちだ。県立の技術短大からも庭師、大工などの職業体験講座の開設提案を受けた。

「県独自の事業だけでは予算のない事業は無理だった。走りながらプログ

ラムを膨らませていきたい」(廣田氏)。官民協力の混成チームが生み出す「相乗効果」に期待を募らせている。

### 必要な保護者の意識改革

高校・大学の在学生向けの事業としては、①出前授業②職場見学会③インターンシップの支援④就業体験研修——など。四〇〇五〇代の働き盛りによる出前授業は昨年も県内で、経営者協会の事業として県立高校二〇校で実施し、今年は私立校にも拡大する予定だ。授業を通じて、生徒一人ひとりが自分の問題として働くことの意義を実感してもらったことが重要だが、実は保護者の意識改革も必要だと感じている。

を占めるフリーター・未就職者に同伴する親が目立つ。同センターでは、カウンセリングに当たっては、「若者の視線にたった相談」に心がけている。しかし、親がついてくると、望む就職先として大企業の名前が口をついて出てくる人が多い。廣田氏は「親が干渉しすぎ。親へのアプローチも考えなければならぬ」との確信を強めている。つい先日、県立の工科高校で企業の人から体験談を聞き、企業・職業の現実を理解してもらったための「保護者向けセミナー」を開いたばかりだ。

### 若者の目線でカウンセリング

来訪する若者の姿は、一様に自信なさげだ。保護者の期待とは裏腹に大半

がカウンセラーに対して、「自分は何かをいいかわからない」と不安な気持ちを持ち打ち明ける。その不安感を和らげ、これまでの経歴を聞き、本音が出てから初めてアドバイスに移る。そのため、一時間は最低必要。若者の目線にあわせた「勇気づけから、動機づけへ」というプロセスが不可欠だと実感しているからだ。

ナーを企画したところ、教育訓練費の軽減を進めたい企業のニーズにマッチ。参加希望者が昨年まで経営者協会が実施していた同種のセミナーの三倍も集まった。

オープン以来、約二〇人の就職が決まった。廣田氏は、スタート間もない割には悪くない数字だと感じている。量より質。ひとりの相談に最低一時間かけるシステムではおのずから成果としてあらわれる数値も限られる。

『横浜の「ジョブカフェ」は賑わっているらしい』との噂が関係筋に伝わったのか、つい最近、独自に「ジョブカフェ」を開設予定の北九州市から視察団が訪れた。

(調査部 主任調査員・荻野登)

## 職業体験型授業を行うNPO「キーパーソン21」

# 3 社会人講師とワークショップ 楽しみながら自分の夢に接近

職業人の夢いっぱいの話とゲーム感覚の体験型授業を通じて、子供たちに仕事に関する発見や感動を与えたい――。

### 社会人講師とワークショップの組み合わせて仕事に関心を抱かせる

。こんな思いで子どもたちの夢と希望をはぐくむ活動を行っているのがNPO法人「キーパーソン21」(朝山あつこ代表理事)だ。実際のプログラム授業から、そのおもしろさをレポートする。

キーパーソン 21の「自分の夢」発見プログラムは、段階的に仕事に対する関心を深めるのが特徴。まず、社会人講師による特別授業を実施し、仕事の苦勞や楽しさ、子どもの頃からの夢や興味の仕事にどうつながっていくのかなどを生徒たちに知らせ、その後、ワ

ークショップを開いて、仕事の知識を増やしながら自分の関心事に移行していく。先日、横浜市立西金沢中学校で行われたプログラム授業は、コンサーベーション(自然保護活動家)の柴田敏隆氏の



ワークショップでは人生設計のイメージ化に挑戦した

講演からスタートした。柴田氏は、自然と動物を守りたいとの思いで、自然保護活動などに打ち込んできた人生経験を語った。講演で人と仕事を身近に感じた後は、学年ごとに分かれてワークショップを開催。三年生の教室では、「○○な人生!？」と題して、自分の人生のイメージを浮かべたうえで性格判断クイズなどをしながら、各自が自分の将来像を思い描いた。

#### 人生のイメージを考えることからスタート

西金沢中学の三年生は一〇人。机を並べ替え、全員が輪になってプログラム開始だ。まず、担当のファシリテーターから全員に「人生いろいろキーワード」と書かれた紙が配られた。そこには、「華麗な」「細く長く」などたくさん形容詞が書かれてある。このプログラムでは、自分の人生をキーワードで自由に想像し、そこから年収や家族構成、職業などの具体的な自分の生活設計を組み立てていき、最後に

YES/NO形式の性格診断テストをして、辿り着いた適職と生活設計とを組み合わせて仕事を考える。「人生のキーワード」という漠としたイメージからだんだん具体的な人生像が浮かび上がってくる仕組みだ。

キーワードには現実離れたものも含まれており、その解釈自体、生徒によつて理解が異なったりもする。だが、そこは互いに知恵を働かせ、あちこちで他人の人生観に口出しする。

「えー、○○のイメージって、"おだやかな人生"じゃないよ」

「△△は目立ちたがりなのに、"ひっそりとしたな人生"なんておかしくない?」

人生のイメージを絞った後は、収入などの現実的な話題に移り、さらに盛り上がる。自分のなりた職業が見えてきたら、いつの間にか「年収はこの程度かな」「だったら、このぐらいの家に住めるはず」などと現実感を帯びてくる生徒も出てきた。

#### 性格診断 テストから適職探しへ

ワークシヨップも終盤にさしかかり、診断テスト後の適職発表になると、皆すっかりプログラムに集中していた。診断の結果、思ってもみない職業に辿り着く生徒も少なくない。適職とされた仕事自体、よく知らない場合だってある。皆で互いの適職を納得したり否定してみたり大騒ぎだ。

「医者ってどうすればなれるの?」

「働くのは週に三日ぐらいで、後は遊べる職業ないかなあ」

気が付くと、いつしか職業について、知っている情報を教えあう場になっていた。はじめはうしろで見ていた担任の先生も、興味深そうに子どもの輪に加わりアドバイスしている。

#### 仕事を身近に感じるきっかけに

そして約一時間半後。あつという間に「終了」の時刻になった。「あれ? もう終わり?」

「早くない?」

ゲーム終了後は、各自、自分の行動を振り返って、感想を書いて特別プログラムは終了となった。感想は、「自分のタイプを知ることができた」「しつかり考えれば自分の理想があると認識できた」「仕事のことでよくわからない部分があるとつまらない」など、仕事を身近に感じるきっかけになった様子が伺えるものが多かった。

キーパーソン 21の「自分の夢」実現プログラムは総合学習の時間などを利用して、今までに首都圏を中心のべ八〇〇人が受講している。このプログラムで芽生えた生徒の仕事への関心をどう伸ばしていくか。受け入れた学校側が、このプログラムを単発の学校行事で終わらないように、次にどう展開させるかが、工夫の仕所といえそう。

(調査部 新井栄三)

## 川崎市の地域ものづくり協議会

# 4 工業高校の生徒が大学生を指導 ものづくりの街を知ってほしい

神奈川県川崎市は国内有数の工業集積を誇る。しかし、熟練技能者の高齢化が進み、後継者不足に悩んでいる。このままでは技能が継承されない。そ

のため、川崎市当局が音頭をとり、工場体験、インターンシップなどを実施し、ものづくりの重要さを高校生らに理解してもらおうとしている。軸とな

っているのは、教育者、企業経営者、行政担当者でつくる「川崎市地域ものづくり協議会」(座長・鶴飼信一 早稲田大学教授)と「技術・技能継承研究会」。



#### 旋盤や電気配線を教える

昨年十二月、ユニークな試みを実施した。早稲田大学や東京大学で中小企

業論を学ぶ大学生に、市内の工業高校生が旋盤加工や電気配線などの技術を教えた。発案したのは、協議会座長の鶴飼教授。文系学生に実技体験を通じて、ものづくりの大切さを学んで欲しい、というのが目的だ。

参加した大学生は、機械科、電気科、建設科に分かれ、高校生から指導を受けた。機械科はコンピュータで作成した設計図を基に旋盤で金属を削り、立方体を製作。電気科は電気回路の配線作業を行い、建設科は、カンナなどを使い、日本古来の建築方法で、木材を切り刻んで接合させる「仕口（しくち）」づくりを体験した。

いつもは教えられない立場の高校生が先生となった。立場が変わることによって新たに発見することも少なくない。例えば、高校生から「改めて自分の技術力を再確認できた」「教えることがいかに難しいかということが分かった」

などの感想が寄せられている。川崎市経済局産業振興部・成田伸治工業係長は、高校生に「教えることによって学び、技術継承の難しさを認識してもらい、ものづくりに興味を持ってもらいたい」と語る。

## 二年次にインターンシップ

インターンシップの対象は、主として工業高校の二年生で、一社につき二人程度のグループをつくり、製造現場で就業体験。期間は、夏休みの三日間。一日目の午前に企業概要、製造工程など工場全体の構成や仕組みなどを説明し、現場での安全管理を徹底するためのオリエンテーションも行う。その後三日目の午前まで実際の製造現場を体験する。最終日には三日間の日誌等の整理、まとめを行うというのが典型的なパターンだ。

短い期間だが、現場の迫力、ミス

ターの技術のすごさを体験する。高校では学べないものを実感するのだ。とはいっても、ものづくり企業にすぐ就職しようという気持ちにはならないようだ。

企業もインターンシップを通じて、高校生を採用したい。しかし、実際には難しい。いまのところは、ものづくりの街である地元川崎市に興味を持ってくればよい、というぐらいの気持ちで学生を受け入れている。ただ、メリットがないわけでもない。高校生を教えるためには、従業員は技能についてちゃんと頭で整理し説明しなくてはならない。これは従業員の技術向上につながる。

## 地域のネットワーク作りが大切

高校の先生にもっと工場現場を見て欲しい、と成田氏は言う。先生がものづくりの大切さ、マイスターなどの技

術のすごさを目の当たりにしないと生徒にそれを伝えることはできないからだ。

また「高校の先生と地域企業の関り、そして地域企業と工業高校のネットワークづくりが大切」と語る。川崎には工場が散在している。しかし、高校生は自分の近くの工場が何を作っているのかも知らない。地域の企業と高校が積極的にネットワークを作っていく。これも協議会の狙いの一つだ。

協議会はそのほか、経営者、若手社員と高校生の対談、川崎市が認定したマイスターの講演などを実施している。さらに、川崎市のホームページに、市内の工場を紹介したサイトを立ち上げている。「夢工場発見ビジュアルマップ」と名づけ、主に子供を対象に工場の魅力を伝え、科学技術への興味がわくよう、工夫している。

(調査部 才川智広)

# 04年版「ものづくり白書」 次代の人材育成教育が重要

ものづくりの源泉である製造現場での技能継承について、六割の企業が危機感を抱いている。製造現場の高齢化が進展する一方で、若者のものづくり関連職業への関心の低下が背景にありそう。明日のものづくりを支える人材を育成するためには、どのような施策が必要か。

厚生労働省・経済産業省・文部科学省が共同で六月一日、わが国製造業の現状と課題を網羅的に分析した「ものづくり白書（製造基盤白書）」をまとめた。白書では、官民挙げて早い段階からものづくり人材の育成に取り組みむ必要があると提言。若者の能力開発の推進やものづくりへの意識を啓発し、「日本版デュアルシステム」などを通して総合的なものづくり力を持つ人材育成

を支援していくことの重要性を強調している。白書は教育現場での実例を多く紹介している。

## ものづくり教育の事例

### 【目指せスペシャリスト事業】

○群馬県立前橋工業高等学校

スペシャリスト研究部を設け、エコハウスの調査研究、クリーンなエネルギーの実験研究、風力発電機の製作研究に取り組み、環境に配慮したものづくり技術の大切さを学んでいる。クリーンなエネルギーや環境問題に配慮したものをづくりのできる工業技術者の育成を目指している。

### ○高知県立高知工業高等学校

三次元CAD（コンピュータ援助設計）を使った、古来からの大工術の

研究、重要文化財の建造物の調査、地域との連携によるプラント台の製作実習や土佐瓦などの製造過程の学習研究に取り組みしている。建築の基礎や伝統を学び、三次元CADを使いこなす宮大工の育成を目指している。

### 【インターンシップの事例】

○山口県立下関中央工業高等学校

地域の人材をキャリアアドバイザーとして活用し、講習会を行ったり、ヤングキャリアセミナーを開催するなど、職業に関する生徒の興味・関心や知識を高める取組を積極的に進めている。二年生は全員が製造業や建設業などで二日間のインターンシップを実施している。

### ○苫小牧工業高等専門学校

専門必修科目として関連分野の企業、団体、公共機関などで実習訓練を実施、実社会のルールと専門知識を学んでいる。

## 【その他の事例】

○長崎県立諫早高等学校

「夢開発理数探求」という独自の科目を設け、実験器具やロボット製作などのものづくりを体験することにより、創意工夫を促し創造性の育成を目指した取り組みを行っている。

○豊田工業高等専門学校

地域の中小企業との共同研究、技術セミナーなどを積極的に推進し、多くの共同研究実績を上げていく。

○八戸工業高等専門学校

「高性能光触媒搭載空気清浄機」を民間企業との共同研究により開発。

○有明工業高等専門学校

地域からの技術支援要請により、「環境・福祉機器」を地元企業と共同開発。

○都城工業高等専門学校

モンゴル技術科学大学と開発した「小型風力発電機」を地域企業との連携により改良。